明倫紀要 20 (1)　27-35　(2017)

総　　説

古代エジプトの神話と呪術

内田杉彦
明倫短期大学　歯科衛生士学科

Myth and Magic in Ancient Egypt

Sugihiko Uchida
Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College

キーワード：古代エジプト，神話，呪術，医術
Keywords: Ancient Egypt, Myth, Magic, Medicine

1．はじめに

古代人にとって自然界は，理解や予測が難しく不確実な存在であった．彼らは自然界を，独自の「意志」と「力」をもつ（したがって予測のつかない）ものとみなし，自然界が人間に恵みを与え，災いを及ぼさないようにするため，自然界を支配する存在を崇める「宗教」や，そうした存在を利用し防ぐ「呪術」を生み出したと考えられる．

古代エジプトの人々にとっては，彼らの周囲の自然界は，豊かな収穫をもたらす大河ナイルの氾濫に示されるように恵み深い存在であり，神々の創造した「秩序」に守られた世界であると信じられていた．しかしこの古代エジプト人の「世界」は，「混沌」の領域である砂漠に囲まれ脅かされる存在でもあり，世界が混沌によっていつか飲み込まれるのではないかという不安は，彼らの心理のなかに常に存在していたと思われる[1]．

秩序が支配しているはずの「世界」も，混沌から無縁ではなかった．ナイルの氾濫の規模は必ずしも一定ではなく，そのために凶作・飢饉や水害が起きることがあったし，疫病によって多くの人命が失われることもあった．劣悪な衛生環境もまた，人々の生活，とりわけ妊産婦や乳幼児の生命を脅かしていたであろう．

なによりも古代エジプト人は，昼夜の交代やナイルの氾濫現象といった「秩序」そのものが自動的に続くという確信をもっていたわけではなく，それがいつか終わるかもしれないという不安が，彼らの世界観の根底にあったと思われる．恩恵に満ちた「世界」は神々の支配下に置かれているとされたが，そこには魔物や悪霊もおり，神々のなかにも人間に悪意を抱くものがいて，それらが人々の生活を脅かしていると考えられたのである．

こうした邪悪な存在から身を守るため，そして「世界」そのものを周囲の「混沌」から守るためにも，

先王朝時代（紀元前5500～3000年）
王朝時代（紀元前3000～332年）
初期王朝時代（第１～２王朝：前3000～2682年）
古王国時代（第３～６王朝：前2682～2191年）
第一中間期（第７～11王朝：前2191～2025年）
中王国時代（第11～12王朝：前2025～1794年）
第二中間期（第13～17王朝：前1794～1550年）
新王国時代（第18～20王朝：前1550～1069年）
第三中間期（第21～25王朝：前1069～712年）
末期王朝時代（第25～31王朝：前712～332年）
ギリシア系王朝時代（前332～30年）
プトレマイオス朝時代（前304～30年）
ローマ支配時代（前30年～後395年）

表１　古代エジプト年表（内田杉彦『古代エジプト入門』岩波書店，2007の年表より）

原稿受付：2017年３月31日，受理　2017年６月２日
連絡先：〒950-2086　新潟市西区真砂3-16-10　明倫短期大学　内田杉彦　TEL.025-232-6351（内線166）

人間に対して好意をもち続けてくれるように神々を崇める必要があった．エジプト国家の支配者である王（ファラオ）は，神々と人間の仲介役として，祭祀や神殿の建設（神々に対する奉仕）をおこない，それによって「世界」の秩序を守る役割を負っていたのである．

しかし神々の助けを得るには，供物と祈りを捧げるだけでは不十分であり，神々の力を利用する呪術もまた，古代エジプト人の生活のなかで大きな位置を占めていた．

2．古代エジプト人と呪術

古代エジプトの宗教と呪術はひとつの信仰の一部を成していたのであり，たとえばエジプト独自の来世信仰を支えていたのも呪術だったと言える[1)2)]．死者の供養のためには，死者が来世に復活を遂げ，供物を与えられるよう祈願する呪文（供養文）が墓碑などに刻まれ，遺族や神官によって唱えられた．それによって呪文に列挙されているさまざまな恩恵が死者のもとに届くと信じられていたのである．「ピラミッド・テキスト」や「死者の書」のような葬祭文書も，死後の再生のための呪文を集めたものであって，いわば呪術を用いた来世へのパスポート，案内書であったとみることができる．

神官も呪術を用いて神々に奉仕し，「世界」の秩序を維持する役割を果たしていた[1)2)]．彼らは，本来は王が担当すべき職務である祭祀を代行し，神々はそれにこたえて王権を強化し，戦勝や豊かな収穫をさずけて「世界」を守ると考えられていた．神官が神のために毎日おこなう祭祀は，神殿にまつられた神像のため香を焚き，清めや化粧をし，供物を捧げる儀礼からなっており，その際に神官がとなえる呪文によって神が神像にやどり，供物（のエッセンス）を摂取して活力を得るとされていたのである．この儀礼の場面は神殿の壁面浮彫に刻まれているが，これも，こうした儀礼が永遠に続くよう保証する「呪術」であった．季節の移り変わりや昼夜の交替も，彼らが行う呪術のおかげで保証されるとされていたのである．

呪術は民間信仰とも深く結びついていた．病気や災害，不慮の災難などは，悪霊や魔物，悪意を抱く神の仕業とされており，そのような災いに対処し，それを予防するために，呪文や護符などの「まじない」が用いられ，神官や呪術師が病気の治療や魔除けをおこなった[1)2)]．彼らが用いた呪文のなかには，神々に助けを請うだけでなく，祈願に応じるよう神々に命令するものや，神々を脅すものまであった[2)]．私的な願い事が叶えられるかどうかは，結局は神の意思や宿命に左右されると思われていただろうが，できる限り叶えてもらえるように呪術を利用することは問題とされなかったのである．

人間が神々に奉仕している以上，神々もまた，その返礼をする義務があるとされていたのであり，神々が人間の祈りに応えなければ，人間は信仰を失って神々への奉仕を行わなくなり，それは「世界」の崩壊にもつながってしまう[2)]．古代エジプトの呪術は，このような神々と人間の「ギブ・アンド・テイク」の関係を前提としており，それを補強する役割を果たしていたと言えるだろう．宗教と呪術の区別が曖昧だったことは，前1200年頃の神殿に奉納された石碑に，神に捧げる「耳」を刻んだものがしばしばみられることでも示される．この種の石碑は，祈願を聞き届けてくれる神を讃えたものとも言えるが，願いごとをどうしても聞き届けてもらうため専用の「耳」を奉納した「まじない」とも解釈できるのである[2)]．

事実，呪術は，神が人間に授けた「賜物」とされていた．紀元前2000年頃に書かれた文学作品「メリカラー王のための教訓」には，世界を作った神（創造神）が民衆の支えとするため王権を作り，不慮の災難による打撃をそらす武器として人間のため呪術を定めたと記されている[3)]．「呪術」は，災難に対抗する「武器」として神から与えられたものだったのであり，とりわけ妊産婦や幼児，病人，老人，そして共同体の一員とされていた死者のような「弱者」を守り，救う手段だったと言える[1)2)4)]．もちろん，呪術によって災難から必ず守られ救われるわけではないことは理解されていたであろう．呪術はあくまでも，戦うための「武器」にすぎなかったのである．

呪術は，合理的に説明できない災難の原因について，当時の人々が理解できる解釈を与え，「敵は何者か？」「自分はなぜこんな目にあうのか？」などといった不安や疑問に応えることができた[1)2)4)]．呪文には，災難の原因として考えられるものがいくつも挙げられる場合がしばしばあったが，それは呪術に対する信頼を損なうことにはならず，それだけ多くの原因に対応可能な呪文なのだという心理的効果をもたらした．それはまた，できるだけの予防策や対策は尽くされているのだという安心感や，必ず状況が改善されるはずだという希望を与えることにも

なった．たとえ呪文の効き目がなかったとしても，少なくとも慰めにはなったのである．

呪術においては，災難にあう人間はすべて無辜の被害者であり，「天罰」をこうむった罪人とはみなされない[2]．神々さえ，災難の元凶とされれば非難・攻撃の的となるのである．呪術のなかには敵に害を及ぼすことを目的とした呪詛も含まれており，呪術を悪用した者は罰せられ，とくに王を呪詛した者は極刑に処されたが，呪術そのものは，人々の生活と世界を守る合法的な手段のひとつであった．呪術はまさに神からの賜物であって，その背景にあったのは，神々に対する信仰や神話だったのである．

3．古代エジプトの神話と呪術

古代エジプトの呪術と神話は密接な関係にあり，神話のエピソードは，呪文や魔除けの護符の由来や意味を示し，呪術がどのような効果をなぜ発揮するのかについての裏付けとなっている．当時，崇拝されていた神々のうち，その由来を示す神話が伝わる神はわずかであるが，それはおおむね呪術に関わる神である[2]．古代エジプトの神話のなかには，もっぱら呪術の効力を保証する根拠として創作されたものが含まれる可能性がある．

神殿の浮彫や彫像に表された古代エジプトの神々のイメージは，人間の奉仕と引き換えに世界秩序を守る不滅の存在というものだろうが，神話に描かれた神々は災難にあって苦しみ，死ぬことさえある．彼らは神話のなかでは人間と同じく宿命に従わなければならず，不運を克服するために呪術を必要とするのである．しかしこのような神々の姿は彼らの弱さを示すことにはならず，むしろ呪術の効力を示す裏付けとなった[1)2)]．神がある呪文を用いて身を守ったことを伝える神話は，その呪文の効果を示す先例とされ，神によって効力が証明された呪文なら，人間にも効き目があるはずだと考えられたのである．

古代エジプト人の呪術は，彼らの世界が創造された頃に起源を持つとされる[1)2)]．エジプト各地で作られた創世説話によると「世界」が作られる前には果てしなくひろがる混沌の海（ヌン）があり，そこは光のない暗黒の領域であった．中部エジプトのヘルモポリスで作られた創世神話[2)4)]によれば，このヌンの内部には創世を促す原動力である男女４組の神々（「八柱神」）が存在し，彼らの生んだ「卵」から，「世界」を作る創造神が生まれたとされる．この創造神は，ヌンから出現したロータス（睡蓮）の花弁から幼子の姿で出現したとも伝えられる．

太陽信仰の聖地ヘリオポリスの創世神話[2)4)]によれば創造神はヘリオポリスの太陽神アトゥム（あるいはラー）であり，自らの体内から男神シュウ（太陽神の光で満たされた大気）と女神テフヌト（湿気）を生んだとされる．一方，メンフィスに起源を持つ創世神話[2)4)]によれば創造神は工芸の神プタハであり，創造したいと思うものを心（知性）で考え，その名を言葉にすることで現実のものとしたとされた．この知的な天地創造のプロセスはヘリオポリスの創世神話にも採用され，太陽神も，創造すべきものを知性（スィア）によって考え，発言（フウ）によって現実化したとされるようになる．作りたいものの名前を口にして実現させるという創造神の行為は，古代エジプト人にとっては「世界」ではじめて実行された呪術であり，人間が呪文を唱えてその内容を現実のものとする呪術の先例となったと言える[2)4)]．

古代エジプト語で「ヘカ」と呼ばれる「呪術」はそれゆえ天地創造を可能にした原動力であり，スィア（「知性」）やフウ（「発言」）とともに創造神の本質とされ，また，独立の神とも考えられた．ヘカ神は，ヌンに咲いたロータスから生まれたとされる幼い創造神の姿で表される場合があり，ヘカ（「呪力」「呪術」）が宇宙の誕生と密接なつながりを持つとされていたことがうかがえる[2)]．

創造神（太陽神）はやがて太陽となって，天空と冥界をめぐる舟で永遠の船旅を開始し，それによって時の流れが保たれるようになったと信じられていた．この舟（太陽舟）には随員の神々も乗っており，そのなかにはスィア，フウとともに，成人男性の姿のヘカ神が加わっている[1)]．創造神の子であるシュウとテフヌトは男神ゲブ（大地）と女神ヌト（天空）を生み，世界（宇宙）を構成する主な要素（大気，湿気，大地，天空）が揃う．ゲブ（大地）のうえにシュウ（大気）が立ってヌト（天空）を支えるという宇宙の構造図は宗教文書にしばしば描かれており，これら宇宙を構成する神々を礼拝する者たちのなかにも，ヘカ神の姿が見られる[2)]．

ヘカの名にはライオンの胴体の後ろ半分を示す文字が使われており，ヘカ神はこの文字を頭上にのせた姿でも表される．この文字は，おそらくライオンがもつ「瞬発力」「推進力」を象徴しており，ヘカが宇宙の「原動力」であることを示すとみることができる[1)2)4)]．また「ヘカ」という語は，「カァ（生命力，活力）を突き動かすもの」」という語に由来

するとされる[1]．古代エジプト人は，神々や人間，死者だけでなく，万物には生命力（カァ）が宿っていると信じていた．ヘカはそれを起動させて宇宙の働きを支えると考えられていたのだろう．ヘカが太陽神の船旅に同行しているのも，この神（「呪力」）が太陽の運行（昼夜の交代，時の流れ）を助け，「世界」の存続を支える力とされていたことを示している[1)4)]．ヘカは，冥界につながりのある生物とされた蛇をつかむ姿でもしばしば表現されるが，これはヘカが死後の復活・再生にも影響力を及ぼすとされていたことをうかがわせる[1]．

ヘカは自然界に秘められた生命力を動かし，神々と人間，死者の間を結ぶネットワークを構築する役割を果たすとされていたのだろう[1)2)]．自然界にあるもののなかでもとくに（色や形などに）類似点があるもの同士は，互いに通じ合う性質を持つとされており，一方に呪術をおこなえば，もう一方に影響を及ぼし，その力や性質を思いのままにできると考えられていた[1)2)4)]．たとえば，青い素材は水の持つ生命力を秘めていると信じられており，それを用いた護符に呪文を唱えれば，それを「起動」できると信じられていた．神像に向かって唱えた呪文はその神に伝わるとされたし，魚をかたどった護符を身につければ，魚の能力を利用できるから，水に落ちても溺れることがないとされたのである．敵を表した人形を呪詛し，傷つければ，当の相手に害を及ぼすか，少なくともその力を奪うことができると信じられていた．

ヘカ神のほか呪力に関わる神としてはさらに，コブラの姿の女神ウェレト・ヘカウなどがあげられるが，他の神々や魔物も自らのヘカ（「呪力」）をもつとされており，神性を持つエジプト王（ファラオ）や，小人のように一般人と異なった特徴を持つ人間，来世に復活をとげた死者も，それぞれ呪力を持つとされていた[2]．

しかし呪力に満ちたエジプト人の「世界」も最初は不安定であり，創造神（太陽神ラー）がまだ（太陽とならずに）王として地上を治めていた頃，人間が反乱を起こし，罰を受けて絶滅に瀕したとする神話（「天の雌牛の書」）が伝わっている[1)2)]．この神話によれば，人間が反乱を企てているのを察知したラーが神々を召集し，混沌の神ヌンの助言を求めると，ヌンは太陽神の「眼」（日輪）であり，娘でもある女神ハトホルを派遣して人間を罰するよう主張，ラーはそれに従う．ハトホルは，砂漠に逃げた人間たちに襲いかかり，殺戮の限りを尽くして雌ライオンの女神セクメトとなる．夜になってハトホルがラーのもとに戻り，セクメトの姿のまま眠ってしまうと，ラーは生き残った人々を助けることに決め，赤く染めた大量のビールを作らせて地面に流し，血の池のようにみせかける．朝になってめざめた女神は，大地を置い尽くしたその酒を飲み干して酩酊し，人間を殺すことなど忘れ，もとの美しい女神となってラーのもとへと戻るのである．

こうして人類は絶滅から救われることとなったが，人間の裏切りで傷ついたラーは，王位にとどまることに嫌気がさし，いっそヌンのもとへと戻りたいと願う．そこでヌンはヌト女神を巨大な雌牛に変えてその背中にラーをのせ，これによって天空が作られ，ラーは太陽となる．ラーは銀河や星，そして死者の住む来世を作り，ゲブに冥界の蛇たちを監視させ，シュウをはじめとする神々には，雌牛の姿の天空を支えさせる．ラーは月神トトに，夜の間，自分の代理として地上を照らすよう命じ，地上の王にはゲブとヌトの息子であるオシリスを任命するのである．

この神話は，宇宙の成り立ちを説明するとともに，女神セクメトによって「世界」に「災い」がもたらされるようになったことも物語っている．医術が未発達だった古代エジプトにおいては，人々はさまざまな病気によって常に苦しめられており，とりわけ猛暑に見舞われる夏にはマラリアなどの疫病がしばしば猛威を振るったと考えられる[5]．このような病気や疫病は，セクメト女神が魔物たちを連れて舞い戻り，かつてのように暴れ回るためであると信じられていた[1)2)]．太陽神の慈悲によって絶滅を免れたとはいえ，人類は先祖の行いが引き起こした災いを受け継ぐことになったのである．「天の雌牛の書」は，神が創造した秩序ある「世界」になぜ疫病のような災いが存在するのかを説明していると言えるであろう．

疫病の流行を終わらせるには，祭祀や呪術でセクメトをなだめるしか方法がなく，それが成功すればセクメトは，ハトホルや猫の女神バステトのような穏やかな女神に変身して疫病は終息するとされていた．疫病が最も流行しやすい酷暑の時期（7月半ば）はエジプト暦では年末であり，それが無事に過ぎて新年が訪れると，猫の姿となって鎮まった女神の護符を贈物として交換し祝う習慣があった[1)2)]．「天の雌牛の書」それ自体も呪文であり，身体を清めて白

い衣服を着け，舌の上に「秩序」の女神マアトの姿を描いてからこの呪文を唱えれば，長寿と繁栄が得られるという添え書きがされている[3]．創造神が人類を絶滅から救ったという神話が，魔除けの効力を保証する先例とみなされたのであろう．

人々の生活は，サソリや毒蛇，ワニやカバのような野獣にも脅かされており，それらを避けるための呪術も古くから行われていた．魔除けの護符と思われるものは，すでに紀元前4000年頃に貝殻や象牙などを用いて作られており，時とともに神々の姿やシンボルなど様々な形の護符が数多く作られるようになった[1)2)6)]．

どの村の住民も，日常生活に必要な呪文や儀礼を口承によって知っており，彼らのなかには，「まじない師」の仕事を請け負う者もいただろう[1)]．とくに平均寿命が短かった当時の高齢者は賢者として尊敬され，なかには未来の予知や病気治療，魔除けをおこなう呪術師として人々の不安を和らげる役割を担った者もいたにちがいない．

しかし彼ら民間の「まじない師」はおおむね庶民であり，おそらく文字を知らなかったであろう．古代エジプトの文字は，行政や司法，経済など社会の仕組みを動かすために不可欠であり，当時の支配層である官僚や貴族，王族など，ごく少数（全人口のおそらく１割未満）の人々（とくに男性）のみが学ぶものであった．複雑なエジプト文字の修得は，実務に用いられたヒエラティック（「神官文字」）でさえ難しく，人間や動植物などの形を表したヒエログリフ（「聖刻文字」）となると，それを読み書きできた者はさらに限られた．ヒエログリフは神殿や墓の銘文，碑文，宗教文書を記すための神聖な文字であり，大多数の庶民にとっては神秘な呪文そのものだったにちがいない．それだけに，読み書きができた人々は，国民の大多数を占める一般大衆にはとうてい知り得ない秘密の知識を身につけていると思われていたことだろう．読み書きの能力はそれを修得した人々がエリートとしての権威を保つ手段でもあったのである．彼らも，庶民と同じく日々の生活のなかで呪術に頼っており，護符や呪文を利用していただろうが，文字に記された呪文（彼らにしか使えない呪文）を利用できたという点で，庶民よりも有利な立場にあったと言える．なかでも神官は，さまざまな呪文が記された呪術文書を読みこなすだけでなく，医術や数学などの高度な知識も身につけており，文字を知らない民間の呪術師よりも権威をもっていたであろう[1)]．

文字そのものも，それがかたどっている人間や動物などの生命力や呪力を秘めているとされ，「神の言葉」（メドゥ・ネチェル）と呼ばれた．「天の雌牛の書」で創造神の代理とされている月神トトは文字の発明者でもあり，神々の「書記」とされただけでなく，呪文の発明者としても崇められていた．「死者の書」の呪文には，この神の著した原本を写したと称するものがいくつか含まれている[1)]．

「天の雌牛の書」で地上の王権をゆだねられる神，オシリスも，呪術と深い関わりを持っている．この神の神話[2)7)8)]によると，オシリスは王として善政を行い，人々に法や文化，宗教を教えたが，弟のセトによって殺害されてしまう．セトは，贈物にすると偽った箱のなかにオシリスを閉じ込め，そのままナイルに投げ捨て溺死させるのである[1)2)8)9)]．未亡人となったイシスは妹のネフティスとともに夫の遺体を回収，呪力を用いて腐敗を防ぐ．セトがオシリスの遺体を切り刻んでエジプト全土にばらまいたとする伝承もあり，それによればイシスはネフティスとともに夫の遺体を集め，呪術によって接合したとされる[1)2)8)9)]．

いずれの場合もオシリスはミイラとされ，イシスの呪力で一時的に蘇生し，イシスは甦った夫と交わって身ごもる．下エジプトの湿地帯に身を隠したイシスは，味方となった神々の助けで息子のホルスを生み，毒蛇やサソリなどの危険な生物から，呪力によってホルスを守り育てる．やがて成長したホルスはセトの悪行を神々の法廷に告発するが，セトを支持する神々もおり決着がつかない．ついにホルスはセトに挑戦，激しい戦いの末に打ち負かし，ようやく父の王権の継承を認められる．敗れたセトは不毛の砂漠に追放されてその支配者となり，オシリスは来世の支配者として再生，永遠の生命を得るのである．オシリスが一度は殺害されながらも来世に甦り，永遠の生命を得たとするこの神話は，「死」が新たな「生」への通過点にすぎないことを示し，人々に死後の復活・再生への希望を与えるものとなった[7)]．

オシリスは本来，複数の神々が合体した神だったと考えられるが，そのなかに穀物の神が含まれることは，壁画などに描かれたオシリス神の肌がしばしば緑（植物の色）や黒（ナイルの谷の肥沃な泥の色）に塗られていることで暗示されている[1)7)]．オシリスが死後に再生を遂げることができたのは，ひとつ

にはこの神が，エジプトの国土に繁茂する植物，とりわけ穀物の生命力を持つためであると信じられていたのだろう．穀物，とくに発芽した穀物を，死者の再生・復活を助ける「まじない」として墓におさめる習慣は，オシリス信仰が盛んになった中王国時代（紀元前2000年頃）にはすでに行われており，当時の葬祭文書「コフィン・テキスト」の呪文には，オシリスの遺体から大麦が発芽することがすなわち死後の再生を示すとするものが含まれている[1)10)]．

新王国時代（紀元前1400年頃）にはオシリスの輪郭をかたどった木枠に大麦を混ぜた土を詰めたもの（「オシリスの苗床」）が作られた．この「苗床」には水やりがされ，やがて大麦が発芽すると，再生の呪力を秘めた副葬品として王族や貴族の墓に納められたのである[1)7)10)]．

末期王朝時代（紀元前700年頃）には，土と大麦をこねて小さなミイラの形にし，樹脂と亜麻布で覆ったもの（「穀物ミイラ」）が，より身分の低い人々のために作られるようになる[1)10)]．毎年のナイル氾濫が終わりに近づく頃（太陽暦の11月前半）には，オシリスの復活を祝う祭礼（コイアク祭）がおこなわれたが，そのたびにこの「穀物ミイラ」が各地で作られ，墓かあるいは「穀物ミイラ」専用の小さな墓穴に，前年の「穀物ミイラ」に代えて安置された．このようなことが行われたのは穀物の播種を目前に控えた時期であって，祭礼と「穀物ミイラ」に秘められた呪力が，穀物の発芽と豊かな収穫，そして死者の再生をもたらすと信じられていたのだろう[1)]．

「オシリス神話」と呪術との関わりはイシス女神によっても示される．殺害された夫オシリスを復活させ，息子のホルスを守り抜いたイシスは，それを可能にするほどの呪力をもつ女神とされ，乳幼児死亡率が高かったと思われる当時，とくに子育ての神として崇められた．このため，護符や神殿に奉納するための神像には，ホルスに授乳するイシスの姿を表したものが多く見られる[1)2)6)]．

イシスがなぜそれほどの呪力を持つに至ったのかを物語る神話は，前12世紀のパピルス文書に記されている[1)2)11)]．それによればイシスはどの神々よりも賢く，多くの知恵をもち，万物を知り尽くしていたが，太陽神ラーの「秘密の名前」だけは例外で，それをぜひとも知りたいと願っていた．「名前」はそれが表すものの本質を示すとされ，「名前」を知れば，その所有者の力を利用できると信じられていたため，どの神々も自らの力をたやすく利用されないように数多くの称号や名前を持っていた．祈りや呪文で神に呼びかけるには，神の名前と称号をできるだけ数多く列挙する必要があり，そうすれば神は，唱えられた名前や称号のどれかに反応するのである．しかし，神の真の力はその「秘密の名前」にこそ秘められているとされていた．イシスは太陽神ラーの「秘密の名前」を知ることで，「世界」を創造したラーの持つ強大な呪力をすべて手に入れようと考えたのである[1)2)]．

さて太陽神ラーは，当時はまだ空に上っておらず，お供の神々を連れて国土をめぐるのを日課にしていたが，すでに年老いており，歩きながら涎を垂らすことがあった．太陽神の涎には，この神の呪力が宿っていたので，イシスは，この涎と泥をこねあわせて毒蛇を作り，呪力によって生命を与え，ラーがいつも通る道筋に隠しておいた．やがて通りかかったラーはこの蛇に噛まれて叫び声を上げる．すぐに神々が駆けつけるが，ラーは体内に毒が回ったため痙攣を起こし，口をきくことができない．やがて気を取り直したラーは，自分の知らない何者かに噛まれたと訴え，毒が体内に回っていることを告げて，呪力や知恵の優れた神を，治療のため呼ぶように命じる．

そこでイシスが何食わぬ顔で進み出て，治療を申し出る．イシスは，治療する相手の名を呪文とともに唱えなければならないから，名前を教えるようにとラーに告げ，そこでラーは自分の様々な名前や称号をイシスに告げるが，効き目はない．イシスはラーがまだ口にしていない名前，「秘密の名前」を教えるように要求し，遂に折れたラーはそれをイシスに耳打ちする．こうして「秘密の名前」を知ったイシスは太陽神ラーと同じ呪力を使えるようになり，呪文を唱えて蛇の毒を取り除き，ラーを救ったのである．

この神話にはイシスが最後に唱えたとされる呪文も記されており，サソリの毒消しに効能があるとする説明と使用法が添えられている．それによると，この呪文を唱えながら，太陽神やイシス，ホルスの姿を患者の掌と布に描いて嘗めさせ，その布を患者の喉にあて，薬草をすりつぶしてビールかワインと混ぜたものを患者に飲ませるとされている．イシス女神が策略によって太陽神の「秘密の名前」を聞き出すというこのいささかユーモラスな神話は，毒消しの呪文の効力を保証するために創作されたものなのかもしれない．

図1　「ホルス碑」（キップス）

イシスに守られたホルスが無事に成長したことも，この親子を脅かした毒蛇やサソリ，ワニなどから子どもを守る呪術の原型となった．ホルスもまた，そのような有害な生物を打ち負かす呪力をもつとされ，この神の姿を表現した「ホルス碑」（キップス）と呼ばれる魔除けが，末期王朝時代からローマ時代にかけて数多く作られる[1)2)12)]．これは頂部が半円形の石碑の形をしており，正面に裸体の幼いホルス（ハルポクラテス）の像，その頭上には，夫婦と子どもを守る小人の神，ベスの顔がそれぞれ刻まれている．ハルポクラテスはワニを踏みしめ，手には蛇やサソリ，ガゼル，ライオンなどをつかむ姿であり，有毒な生物や野獣をしりぞける神であることが示されている．この「ホルス碑」は護符として作られることもあったが，石碑として作られ屋内の祭壇に安置されたり，神殿のような公共の場所に建立されることもあった．

そのような大きな「ホルス碑」には，ハルポクラテスを守るイシスやネフティス，太陽神ラー，ヘカ，トトなどの神々の姿とともに，蛇やワニを防ぐ呪文や毒消しの呪文が一面に刻まれているが，現存する最大の「ホルス碑」とされる「メッテルニッヒ碑」には，これらの呪文にくわえて，2つの神話が記されている[12)]．最初の神話では，毒が体内にまわって苦しむホルスを救おうと，イシスが空に向かって叫んで太陽舟を停止させ，そのために，時の流れが止まってしまう．そこで太陽神に派遣されたトトが呪術によってホルスを癒し，太陽舟も動けるようになって「世界」も救われたとされる．もうひとつの神話では，ホルスを身ごもったイシスがセトから逃れ，7匹のサソリを護衛として湿地帯へと向かう．彼らが一夜の宿を求めて裕福な家に近づくと女主人は恐れて戸を閉ざすが，貧しい家の主婦は迎え入れてくれる．7匹のサソリは自分たちを閉め出した女主人に腹を立て，そのうち1匹が仲間すべての毒を引き受けて女主人の家に忍び込み，毒針で彼女の幼い息子を刺す．苦しむ幼子と嘆き悲しむ女主人に同情したイシスは呪術によって毒を取り除くのである．

これらの神話でイシスやトトが唱える呪文には，どの子どもにも効果があるという添え書きがされており，ここでも神話が呪術の効力を保証していると言える．ただし呪文を唱えるまでもなく「ホルス碑」そのものも呪力を帯びているとされ，文字を読めない者でも「ホルス碑」の表面に触れるだけで魔除けのご利益を得られると信じられていた[1)]．「ホルス碑」にはハルポクラテスの顔面がすり減っているものが見られるが，これはご利益を願う巡礼や病人に触れられ続けた結果とみられる．また「ホルス碑」に水を注げば，それは表面の呪文や神々の像の呪力を吸収して毒消しなどの治療薬になると信じられており，公共の場に建立された「ホルス碑」の台座には，しばしばその呪力を秘めた水を受ける水盤が彫り込まれた[1)]．

ホルスと呪術の関わりは，古代エジプトの代表的な護符のひとつ，「ホルスの眼」（ウェジャト）にも示される．ホルスはセトとの戦いで左目を傷つけられ，あるいはえぐり取られてしまうが，この左目はトトによって治療され，二度と傷つけられることのない「健全なもの」（ウェジャト）となる．このウェジャトをかたどった護符が古代エジプト史を通じて数多く作られるのである[6)]．

ホルスはセトに勝って王となり，ホルスの化身とされた歴代の国王がその後を引き継ぐ．しかしセトは滅びたわけではなく辺境へと追いやられただけであり，「世界」を脅かす存在であり続けた．砂漠に住む異民族や野獣，季節ごとの砂嵐は，セトの支配

する混沌の力が現実の脅威となったものとされたのである．このため宗教儀礼や呪術によって，セトに対するホルスの勝利を繰り返す必要があった[1]．ホルスの聖地エドフの神殿では，この神の勝利を再現する祭礼が毎年おこなわれ，この祭礼が呪力によって永遠に続けられるように，その様々な場面が神殿の壁面に刻まれている[1]．このホルスの祭礼は神々が登場する演劇の形になっており，ホルスが神殿境内に設けられた「聖池」で，カバに変身したセトを銛で突く儀礼を含んでいるが，おそらく本物のカバではなくそれをかたどった像が用いられたのだろう[1]．

セトやその配下である外敵をしりぞけるため，それらを表す像を作って傷つけ，破壊する呪術儀礼はほかにも各地で行われており，オシリスの聖地アビュドスの神殿では，蝋で作られたセトの像が火にくべられ，銛で刺される儀式が行われていた[1]．このような呪詛に使われた人形や像の多くは手順に従って破壊されたと考えられるが，完全に破壊されずに埋められたものが発見される場合もある．たとえば，古王国～中王国時代（紀元前2200～1900年頃）に行われたその種の儀式の名残として，後ろ手に縛られた捕虜の人形に呪詛の対象となった異民族や反逆者の名を記したものが発見されている[1)4)]．縛られた異民族の姿は，同じ意味を示す縛られた九張りの弓（「九弓」）の表現とともに，王の彫像の台座や，玉座の足台，王の杖の先端，王宮の床面装飾などにしばしば表されるが，これもエジプトを脅かす外敵を蹂躙する「まじない」であり，世界秩序を守る王が，異民族（混沌の力）を滅ぼし，あるいは押さえこむ力を持つことを示したものと言える[1]．

古代エジプト人の「世界」を脅かしていたのはセトだけではない．創世の後も「世界」を取り巻いているとされたヌンは創造の原動力ではあったが，「世界」を再び飲み込もうとする「混沌」ともみなされていたのである[1)13)]．このヌンのネガティヴな側面が形となったのが大蛇アペピであり，夜間に冥界を航行する太陽神の舟を襲ってくるとされた．太陽神がアペピに飲み込まれてしまえば時の流れは止まり，「世界」はふたたび混沌に戻り滅亡してしまう．そこで太陽神とそれに従う神々は（セトでさえも）毎夜，アペピと戦い，勝たねばならないとされたが，アペピはヌンと同じく不死の存在だったから呪術で無力化する必要があり，王がアペピの目玉を象徴する球を棒で打って，その力を弱めるという儀礼が行われていた[14]．

古代エジプトの呪術は，個人が災いを防ぎ，苦難に立ち向かうための武器だっただけでなく，「世界」を守るためにも必要だったのであり，彼らの信仰の一部として，宗教や神話と密接な関わりをもっていたと言えるだろう．

4．おわりに

我々現代人にとっては，自然界は一定の法則に支配され，かなりの程度まで理解や予測が可能な存在であり，古代人には不可解だった数多くの病気についても原因を知り，治療できるようになっている．しかしその一方で，寺や神社で行われるお祓いや節分の豆まきのような「まじない」，神仏の力が込められたお守りやお札は，我々日本人の日常生活のなかに溶け込んでいる．科学の進歩にも関わらず，人間には理解も予測もできない何らかの力が自然界には存在し，自分たちを脅かしているという不安，そのような恐ろしいものから守られたいという願いは現代人の心の中にも受け継がれているのである．呪術は今もなお，それを信じる人々の心に希望と安らぎを与える神からの「賜物」であり続けていると言えるかもしれない．

＊ 本稿は，2016年度明倫短期大学公開講座（第3回，2016年11月26日）の講演内容に，加筆・修正を施したものである．

文 献

1）Raven, Maarten : Egyptian Magic : The Quest for Thoth's Book of Secrets. The American University in Cairo Press, Cairo, 2012
2）Pinch, Geraldine: Magic in Ancient Egypt. British Museum Press, London, 1994
3）Simpson, William Kelly : The Literature of Ancient Egypt. 3rd ed, 165, 295-296, Yale University Press, New Haven, 2003
4）Étienne, Marc : HEKA : Magie et envoûtement dans l'Égypte ancienne. Réunion des Musées nationaux, Paris, 2000
5）内田杉彦：古代エジプト人と病気．明倫歯誌，3 (1)：60-66, 2000
6）内田杉彦：古代エジプトの「お守り」．明倫紀要，16(1)：10-17, 2013
7）内田杉彦：古代エジプトの「死後の世界」．明

倫歯誌，5(1)：58-63, 2002
8）プルタルコス（柳沼重剛　訳）：エジプト神イシスとオシリスの伝説について．岩波書店，東京，1996
9）Te Velde, H. : Seth, God of Confusion : A Study of His Role in Egyptian Mythology and Religion, 84-91, E. J. Brill, Leiden, 1977
10）Shaw, Ian and Paul Nicholson : The British Museum Dictionary of Ancient Egypt, 81, The British Museum Press, London, 2008
11）Borghouts, J.F. : Ancient Egyptian Magical Texts, 51-55 (No. 84), E. J. Brill, Leiden, 1978
12）Allen, James P.: The Art of Medicine in Ancient Egypt, 49-64, The Metropolitan Museum of Art, New York, 2005
13）内田杉彦：古代エジプト人と神々．明倫歯誌，7(1)：39-44, 2006
14）内田杉彦：古代エジプト人の「遊び」．明倫紀要，19(1)：9-17, 2016